

4. あとがき

昭和62年度報告書をまとめるに当って感じたことを述べ、あとがきに替えさせて頂く。

昭和62年度は、鋼橋発注量が70万トンを超える勢いで、久し振りに多忙な一年となった。内需拡大政策と門戸解放の圧力が旨くかみあって、このような大量の鋼橋の発注に結び付いたものであろうが、反面研究部会のメンバーにとっては、苛酷な一年でもあった。即ち、超多忙な日常業務の合間を縫っての研究会活動をお願いした上、さらに年度末の事業工期締切時期と前後した本報告書の作成を無理強いしたためである。

したがって、十分な成果を期待することは元々困難と考えていた。しかし、3グループの良い意味での競争もあって、ここに成果報告をまとめることができ、深くメンバー各位に感謝している。

本部会以外の会合で、メンバーに合う機会も多いが、「当部会を通じて多くの人と知り合い、何かと仕事がやりやすいことがある。」、「色々な情報を耳にし、自分を鼓舞するのに役立っている。」等々の話を聞き、本報告書以上の成果が実際には挙がっているのではと考えている。

63年度は、門戸解放の動きが急になるであろうし、コンクリート橋との競合も一段と激しくなると予想されるが、補修・補強を含めた維持管理の容易な鋼橋の優位性のPR、また諸外国に負けないメンテナンス・エンジニアリングの確立を目指し、今後も頑張りたい。

以 上